富士山世界遺産センター企画展

探訪 富士山巡礼路

Pilgrim Routes on Fujisan

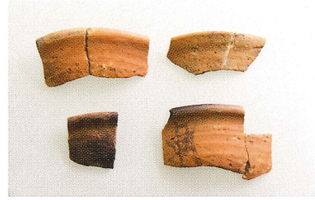
古より多くの人々を
神仏がやどると信じ
られた富士山へと
いざなった信仰の道
各地から富士山に
向かう道をとおして、
富士山の世界は地域を
越えて広がり続けた

吉田口登山道
船津口登山道
富士山道（谷村路）
御中道
胎内道（越後道）
鎌倉街道（御坂路）
若彦路（富士道者道）
鳴沢道
中道往還

Ⅲ 道がつなぐ人とモノ

古代「河口駅」の存在を物語る土器や山梨・静岡両県の遺跡で発見された共通の出土品。道は異なる地域の人やモノを結び付けました。

西川遺跡出土須恵器（右）・製塩土器（左）
奈良～平安時代（８～10世紀）　富士河口湖町教育委員会
須恵器には「川」の墨書が記されており、東海道甲斐路の「河口駅」に関係する資料と考えられています。また製塩土器も発見され、塩が運ばれた「塩の道」でもあった様子がうかがわれます。



村山浅間神社遺跡出土甲斐型土師器　坏（右）・甕（左）
平安時代（９～10世紀）　富士宮市教育委員会
富士修験の拠点村山浅間神社から出土した山梨ゆかりの土器。

Ⅳ 道をたどる旅人たちの記憶

文学作品や絵画に描かれた信仰の道と旅人たちの姿。富士山の世界は多くの人々の間に広がっていきました。

富士山神宮麓八海北口正面略絵図
江戸時代（18～19世紀）
山梨県富士山総合学術調査研究資料

滑稽富士詣
江戸時代　万延元年（1860）
山梨県立博物館

富士御室浅間神社本宮
行者堂跡出土山茶碗（右）
村山浅間神社遺跡出土山茶碗（左）
鎌倉時代（13世紀）
山梨県立考古博物館（右）
富士宮市教育委員会（左）
吉田口登山道からも静岡ゆかりの陶器である山茶碗が発見されています。

富士御室浅間神社本宮
境内地遺跡出土銭貨
主に室町時代（14～16世紀）　山梨県立考古博物館
当時、日本国内で流通していた中国の貨幣も多数発見されました。

富士山世界遺産センター企画展
探訪 富士山巡礼路

協力者・写真提供者（敬称略・五十音順）
石神孝子、小林健二、正福寺、杉本悠樹、永田悠記、新津健、富士河口湖町教育委員会、ふじさんミュージアム、富士宮市教育委員会、宮澤公雄、村石眞澄、山梨県立考古博物館、山梨県立博物館

本誌は企画展「探訪 富士山巡礼路」（平成29年１月１日～同２月27日）の概要を紹介した展示解説である。実物展示以外の資料も含まれる。本文の執筆・編集は西川広平（当館学芸員）が担当した。

（表紙写真）山口晃「富士北麓参詣曼荼羅」（当館）、『滑稽富士詣』（山梨県立博物館）、吉田口登山道馬返

平成29年１月１日 発行
編集・発行　山梨県立富士山世界遺産センター
〒401-0301
山梨県南都留郡富士河口湖町船津6663-1
TEL 0555-72-0259
印　　刷　株式会社 少國民社
〒400-0851
山梨県甲府市住吉1-13-1
TEL 055-226-2125

無断転載・複製を禁じます。

探訪　富士山巡礼路

平成二十五年（二〇一三）六月二十二日、ユネスコ（国際連合教育科学文化機関）世界遺産委員会において、富士山の世界文化遺産登録が決定しました。

世界遺産「富士山」は、登山道を含む富士山の山域のほか、山麓の浅間神社や湖など富士山信仰ゆかりの地を合わせた、合計二十五か所の構成資産・構成要素から成り立っています。点在するこれらの構成資産などの間を結び付け、古より富士山へと参詣に訪れる人々が通った信仰の道が、いわゆる巡礼路です。

富士山の巡礼路は、ヨーロッパに見られるような、各地に広がるキリスト教の霊場などを順番にたどるための一本に集約された経路とは異なり、人々が参詣先として選んだ各霊場を訪れるために、組み合わせを替えながらたどった複数の経路が存在していました。

また、富士山の巡礼路は、①山麓の浅間神社から山頂をめざす登拝路（吉田口登山道、船津口登山道など）、②山中・山麓に点在する信仰の場や、内八海と呼ばれた山麓の湖沼・湧水などをめぐる巡拝路（御中道、胎内道、鳴沢道など）、③関東地方や甲府盆地などから富士山の山麓をめざす参詣路（富士山道、鎌倉街道、中道往還など）というように、訪れる場所や利用する人々の目的に応じて、大きく分類することができます。

山梨・静岡両県では、これらの巡礼路のルートを左のページのような一枚の地図に表しました。この地図を見ると、富士山の巡礼路が、山中・山麓の各霊場間を結ぶ、重なり合いながら張り巡らされた複数の道が集合したものであった様子がわかります。このことは、単に道の特徴だけではなく、多くの霊場を抱えるとともに、人々が様々な想いを込めて富士山に祈った、信仰の多様性という世界遺産「富士山」の魅力を表しているのではないでしょうか。

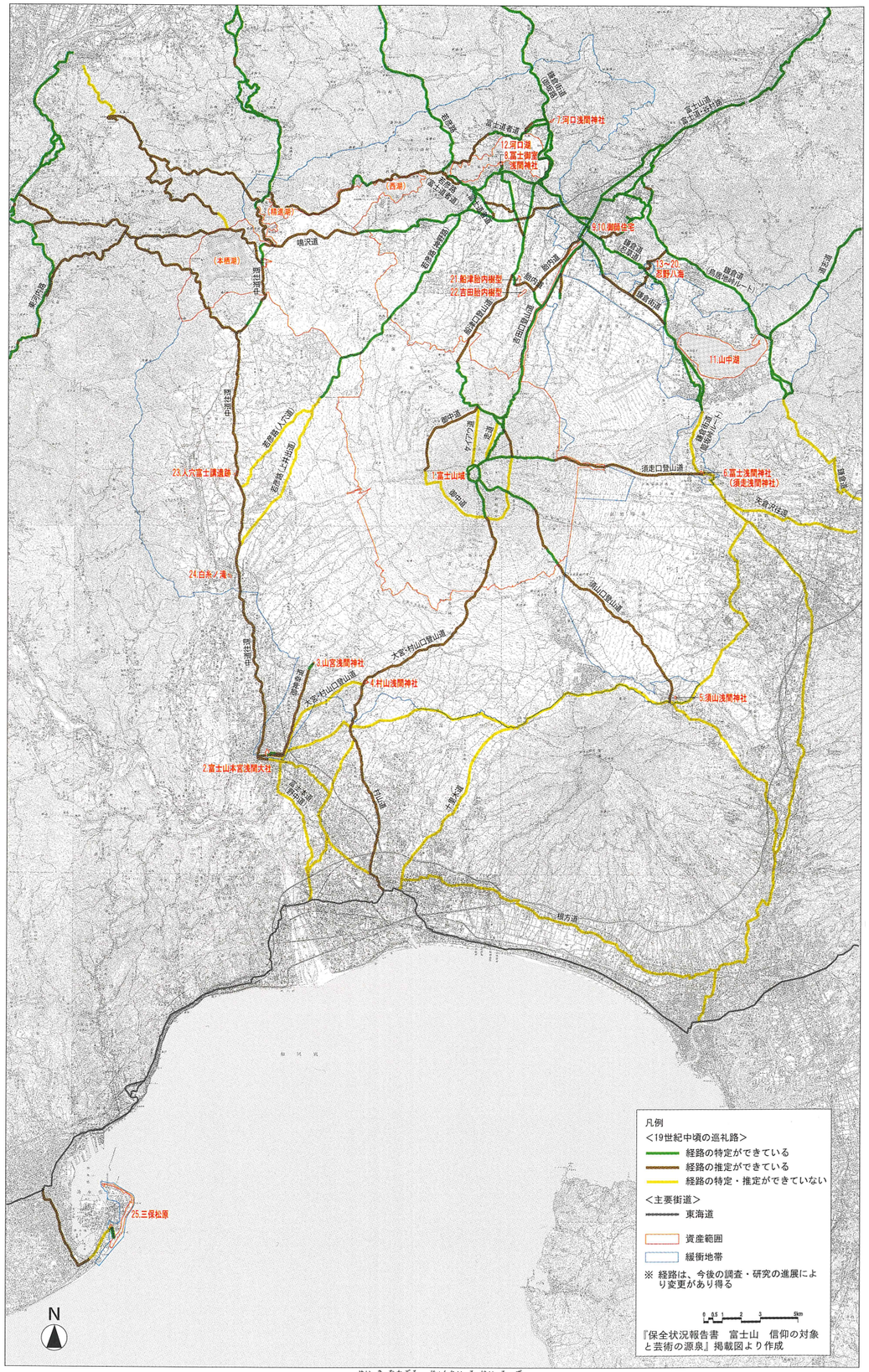
そして、これらの巡礼路の沿道には、今も古の信仰の足跡がそこかしこに残されています。例えば、鳴沢村の大田和地区付近を通る若彦路（上井出道・人穴道）の沿道には、道案内の標示として建てられた石碑がありますが、この正面には「文化十三丙子年念仏百万遍供養　上吉田村前田多兵衛立」、また向かって右側面には「右人穴」、左側面には「山道」と刻まれています。すなわち江戸時代の文化十三年（一八一六）に、上吉田村（富士吉田市）の前田多兵衛という人物が、念仏供養のために人穴（静岡県富士宮市）および富士山中への道案内を表した石碑を建てたことがわかります。

なお、東京都練馬区に残されている江戸時代末の富士講の道中日記を見ると、当地の富士講の道者（信者）は、甲州道中経由で上吉田の御師住宅に到着し、船津胎内樹型（富士河口湖町）や北口本宮冨士浅間神社（富士吉田市）に参詣した後、吉田口登山道を登り、馬返・鈴原社（一合目）・冨士御室浅間神社本宮（二合目）・御中道の小御嶽神社（五合目）・烏帽子岩（七合五勺）を経て八合目の岩室に宿泊、そして翌朝に山頂で御来光を拝みました。また、上吉田に下山した後は、人穴や白糸ノ滝（静岡県富士宮市）に参詣し、東海道経由で帰路についていますが、上吉田に到着した富士講の道者が人穴方面に往来したことがわかり、石碑に刻まれた内容と一致しています。富士講の道者たちは、確かにこの場所を歩んだのです。

江戸時代の富士講の賑わいは、『富士山道しるべ』を始めとする案内書や、道者の旅を題材とした『滑稽富士詣』などの文学作品を生み出しました。これらをとおして、当時の信仰の旅の様子をうかがうことができます。

今後、世界遺産「富士山」に関する調査・研究は、これまでの各構成資産・構成要素を対象とした「点」の研究や、巡礼路を対象とした「線」の研究に加えて、各霊場や信仰の道を通して、日本列島の各地に伝わった富士山の信仰文化の広がりを明らかにする「面」の研究の進展が期待されます。世界遺産「富士山」の魅力を深め、その情報を発信する調査・研究への御理解、御協力をよろしくお願い申し上げます。

（西川広平　当館学芸員）

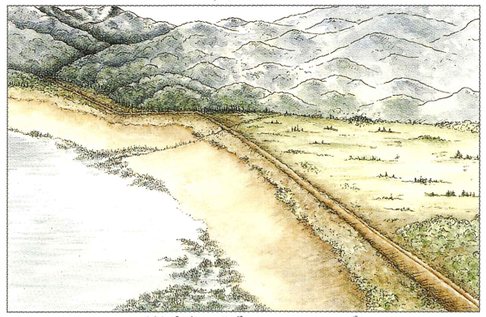


19世紀中頃の巡礼路経路図

Ⅰ　発掘された古代の道

富士河口湖町の鯉ノ水遺跡で発見された古代の東海道甲斐路。後に「鎌倉街道」とも呼ばれました。古より信仰の道として人々が通った街道の遺構や遺物を紹介します。

鯉ノ水遺跡で見つかった東海道甲斐路の遺構

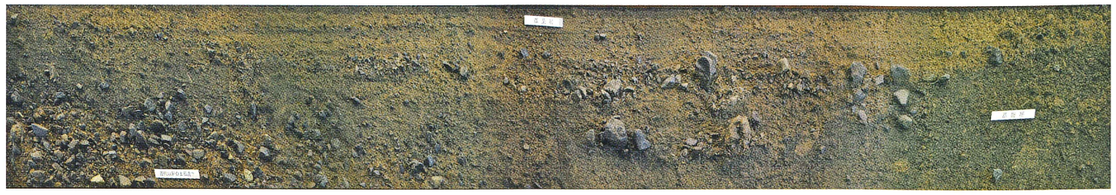


遺跡周辺の古代のイメージ図
（富士河口湖町教育委員会制作）

発掘調査時の景観写真（2013年）

遺跡の位置

『鯉ノ水遺跡』（富士河口湖町教育委員会・山梨県県土整備部、2015年）掲載図より作成



東海道甲斐路の道路断面の剥ぎ取り
奈良～平安時代（8～10世紀）　富士河口湖町教育委員会
地中約2メートルから出土した道路の遺構。幅約8メートルの路面を幾層かにわたり突き固めた版築層が見られ、古代の官道の特徴を持っていることから、駿河国（静岡県）を経由して都と甲斐国（山梨県）とを結んだ東海道甲斐路の遺構であると考えられています。

道路断面の剥ぎ取り作業の様子

鯉ノ水遺跡

河口湖の東岸、富士河口湖町河口地区に立地する遺跡。近代まで使われた旧鎌倉街道の遺構の下から、九～十世紀に起きた土石流で破壊された古代の官道「東海道甲斐路」の遺構が初めて確認され、注目を集めました。また現在は内陸にありますが、当時は湖岸に面していたことがわかりました。

土師器（上）
平安時代（9世紀）
富士河口湖町教育委員会
東海道甲斐路の遺構を破壊した土石流の跡から出土した甲斐型の坏。これらの出土品は、遺構の年代を特定する鍵となりました。

坏・甕類（上・左）
古墳時代（5世紀）
富士河口湖町教育委員会
鯉ノ水遺跡からは東海道甲斐路の時代をさかのぼる古墳時代の遺物も出土しました。時代により河口湖の湖面の広さは変化しましたが、古くからこの地に暮らす人々が存在したことがわかります。

Ⅱ 信仰の道の広がり

富士山の山中・山麓に広がる信仰の道。ゆかりの品々から、当時の道の状況がうかがわれるとともに、一部では、かつての沿道の面影を垣間見ることができます。

山梨県内の富士山巡礼路

①吉田口登山道
北口本宮冨士浅間神社（富士吉田市）を起点に山頂をめざす道。十五・十六世紀には利用され、鈴原大日堂（富士吉田市）・冨士御室浅間神社本宮（富士河口湖町）・中宮（富士吉田市）などの霊場が設けられていました。江戸時代には富士山道を経て関東地方の富士講の人々が往来し賑わいました。

②船津口登山道
御師集落の川口（河口、富士河口湖町）から河口湖を通り、船津胎内樹型（同）を経て山頂をめざした道。主に鎌倉街道を通って富士山をめざした甲信越地方や関東地方北部の人々が利用しました。

③富士山道（富士道・谷村路）
甲州道中の大月宿（大月市）から谷村（都留市）を経て上吉田（富士吉田市）に至る道。十六世紀以降、御師集落の上吉田の発展とともに利用され、江戸時代には江戸（東京）から富士山をめざす富士講の人々で賑わいました。

④御中道
吉田口登山道六合五勺を起点に山腹を一周する道。沿道には宝永山・大沢・小御嶽などの霊場があり、十八世紀以降、富士講の流行によって利用されたと考えられています。

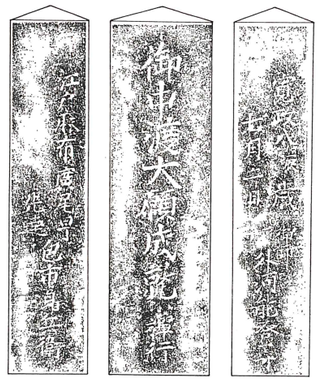
⑤胎内道（越後道）
吉田口登山道の中ノ茶屋から吉田胎内樹型、船津胎内樹型に至る道。上吉田から直接胎内樹型に向かう道も胎内道と呼ばれました。十七・十八世紀の富士講の指導者たちが船津胎内樹型を発見したと伝わり、それ以降、富士講の人々が「胎内くぐり」の修行を行うために利用しました。

⑥鎌倉街道（御坂路）
甲府盆地と静岡県東部とを結んだ道。古代の東海道甲斐路また中世の鎌倉街道として整備されましたが、十五・十六世紀には御坂峠（笛吹市・富士河口湖町）を越えて富士山に参詣する人々も往来しました。上吉田から忍野八海（忍野村）への道や、山中湖から三国峠（山中湖村・神奈川県山北町）への道も「鎌倉道」と呼ばれました。

⑦若彦路（富士道者道・神野路・人穴道・上井出道）
河口湖西岸から船津口登山道、吉田口登山道へ向かう道。主に御坂山地を越えて甲府盆地から参詣する人々のほか、鳴沢道を経て本栖・精進（富士河口湖町）方面、また神野路を経て人穴（静岡県富士宮市）方面から来た人々が利用したと考えられています。

⑧鳴沢道
本栖・精進から青木ケ原樹海を横断し、鳴沢（鳴沢村）を経て上吉田へ向かう道。十六世紀後半から十八世紀前半にかけて、鳴沢に口留番所が設置され、富士山に参詣する人々の通行を管理していました。

⑨中道往還
甲府盆地と東海道吉原宿（静岡県富士市）とを結んだ道。沿道の本栖の関所（富士河口湖町）を警備した渡辺囚獄佑は、十六世紀末まで御師でした。参詣に訪れた人々は本栖から「足機山」（足和田山、富士河口湖町・鳴沢村）をめぐり富士山頂に向かったと伝わっています。



吉田口二合目定善院跡伝承地で出土した石碑（右）
五合目旧富士守稲荷跡周辺で発見された石碑（左）
江戸～明治時代（18～19世紀）
拓本　山梨県立考古博物館

富士山中には、各地の富士講が奉納した石碑が残されてます。右は寛政8年（1796）に江戸麻布広尾町（東京都港区）の先達 包市郎兵衛と上吉田の御師 外川能登守が御中道廻りを記念して建てた石碑、また左は熊谷（埼玉県）の茂木重蔵・家寿が33回の登拝と御中道・内外八海廻りを記念して建てた石碑です。

富士山道（大月市）

御坂峠の行者平（笛吹市）

中道往還の迦葉坂（甲府市）

船津口登山道（富士河口湖町）

富士道者道（富士河口湖町）

鳴沢道（鳴沢村）

八葉九尊図（右）・富士山八葉九尊図（左）版木
江戸時代　延宝8年（1680）　富士吉田市　正福寺

富士山吉田口における信仰の世界を表した図。富士山頂の内院（噴火口）と八葉（峰々）に祀られた大日如来を始めとする仏たち（九尊）を表しています。吉田口登山道の様子を描いた現存最古の絵図であり、まだ御中道や胎内道が成立していない状況や、当時の小屋の位置などがわかります。